

FLORA KANAGAWA

Oct. 10. 2015 No.80

神奈川県植物誌調査会ニュース第 80 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



図 1. ムカゴサイシン (相模原市 2015.5.27 中島 稔撮影).

ムカゴサイシンとクモキリソウ

(中島 稔)

1. ムカゴサイシン *Nervilia nipponica* Makino

これを見つけたのはもう偶然の産物である。

2015 年 5 月 23 日, 相模原市の杉林, 木漏れ日の差し込むウッドチップをひいた小道上にキノコのチャワソウタケを見つけたので, デジカメを取り出してしゃがんで撮影した. ふとかたわらを見る

と、高さ6～7cmくらいの、葉の無い見慣れぬ植物が目についた。茎の先端に細長いツボミを作っているものが10株ほど見えた。ウッドチップ上なので、何か変な外来種でも出たか…と。

良く見るとわずかに開いた花弁にうっすら赤い斑紋が見える。「これはラン科では」。図鑑で見た覚えのあるムカゴサイシンが思い浮かび、写真をバシバシと撮影。でも小さすぎてうまく撮れない。全部失敗で、5月27日、再チャレンジし、帰宅後、写真を城川四郎先生に送ったところ、ムカゴサイシンに間違いないとの返事を頂戴した。

6月17日、再訪したが、既に花期は終了していた。受粉が完了したようで子房がふくらんでいた。果実形成、種子散布を始めた個体も見受けられた(図2)。驚いたことに、今頃になって花柄



図2. ムカゴサイシンの種子散布後の子房(相模原市 2015.6.17 中島 稔撮影)。



図3. ムカゴサイシンの若葉(相模原市 2015.6.17 中島 稔撮影)。

のつけ根から左右に若葉が発生している(図3右側)。傍らには花柄が無いのに若葉だけの発生が見られた(図3左側)。どうやら地中にも株があったらしい。一部のランに見られるように、数年かけて地中に養分を貯めてから花柄を出すのだろう。また来年の花期が待たれる。

ラン科植物は共生菌(ラン菌)が存在しないと成長できないのはご存じのとおりである。最近では植物体内からの菌分離とその培養技術も進み、次々とラン菌の正体が判明してきている。従来は1種類の菌がそのランの発芽、成長に関与していると考えられていた。ところがランの種類によっては、発芽の菌とは別の菌が成長に必要であることが解かってきた。ムカゴサイシンの発芽の菌は普通種であるが、その後の成長菌がなかなか存在していないらしい。生存には複数種のラン菌が必要で、それがこのような希少ランと呼ばれる所以のようである。

ムカゴサイシンも現在全国の菌研究機関で研究されており、遠からずその全容が判明するものと思われる。

標本：相模原市緑区 清水海渡 2015.6.1
SCM51636.



図4. クモキリソウ(横浜市青葉区 2015.6.7 中島 稔撮影)。

2. クモキリソウ *Liparis kumokiri* F.Maek.

我が家から最も近い里山が横浜市青葉区の自然公園で、私の散歩コースとなっている。遊歩道となっている杉林の一角は、小枝、枯草が捨てられ、最近では毎年タシロランが発生するようになった。昨年（2014年）、この積まれた小枝、枯草が取り除かれ、林床がすっきりした感じになった。

そこに、6月7日、なんとクモキリソウが3株発生しているのに気が付いた。内1株はびっしりと花を付けていた（図4）。

小枝を取り除いて陽当たり、風当たりがよくなったので成長したか、それとも元々咲いていたが障害物が取り除かれ見通しが良くなり見つかったかは定かでない。クモキリソウは発芽から数年経たないと開花しない事が判明しているので、この間も葉だけの状態で生育していたと思われる。

横浜市のクモキリソウは勝山輝男先生が緑区で2ヶ所を確認していたが、近年見当たらず絶滅したのと思われていた。今回、お隣の青葉区で見つかったわけだが、横浜最後の株とならない事を祈りたい。

相模原市緑区でサカネランを確認

（秋山幸也）

2015年4月、相模原市緑区青根の山中の菌従属栄養植物（いわゆる腐生植物）のものと思われる芽ばえについて問い合わせがあった。これは、同地区において活動する麻布大学のプロジェクト「あざおね社中」を主導する村山史世氏を通じて江坂順子氏からもたらされたものである。ちなみに「あざおね社中」とは、休耕田の復活や生物多様性の把握・環境教育をおとした環境まちづくりで地域を元気にするを目的として麻布大学の学生、教員、市民で結成された団体である。

問題の芽ばえは、江坂氏が「あざおね社中」の活動の一環として植物相を調べようと青根の山中を歩いていたところ、登山道脇で見つけたものである。筆者は当初、写真の色合いや市内での分布状況などからアオテンマの芽ばえではないかと考えた。しかし、江坂氏も独自に芽ばえ写真の検討を行った結果、サカネランではないかと追伸を送ってくださった。これは生品での検討が必要と考え、詳細な位置の情報を提供いただき、現地へ赴いた。

そこで実際の芽ばえ（図1）と、10cmほど背後（法面側）に昨年のもと思われる立ち枯れた咲き殻を発見した（図2）。開花間近の蕾の形状を実見で

きたことと、この咲き殻が決めてとなりサカネラン *Neottia nidus-avis* (L.) Rich. var. *manshurica* Kom. と同定した。咲き殻は採集し、標本として登録した。

サカネランは勝山ほか（2006）において絶滅危惧 I B 類とされ、箱根と丹沢のやや湿った樹林内において稀に記録がある。菌従属栄養植物であることから発生は突発的で、発見しにくい植物と考えられる。古い記録では今回の確認地点に近い場所での記録はあるものの、近年、相模原市内で



図1. サカネランの花径と蕾（相模原市緑区青根 2015.5.8 秋山幸也撮影）。



図2. サカネランの前年のもと思われる咲き殻（相模原市緑区青根 2015.5.8 秋山幸也撮影）。

の記録は無かった。なお後日、開花写真が撮れることを期待して再訪したが、晴天続きの湯水によるものか開花前の状態で立ち枯れていた。

本報告に際し詳細な情報をご提供いただいた江坂順子氏及び麻布大学「あざおね社中」の村山史世氏に心より感謝申し上げます。

標本：相模原市緑区青根 秋山幸也 2015.5.8 SCM51396.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編), 神奈川県レッドデータ生物報告書 2006, pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

横浜市旭区でセリモドキを確認

(秋山幸也)

2015年8月,横浜市在住の上原 健さんから「見慣れないセリ科の植物が咲いている」と写真が送られてきた。写真を見た瞬間,小葉の粗い切れ込みと大散形花序の柄の多さから,セリモドキ *Dystaenia ibukiensis* (Y.Yabe) Kitag. ではないかと胸が高鳴った。というのも,馬場 (2012) により報告された大和市のセリモドキの標本が,昨年,現地で調査活動をされている石原和子さんから相模原市立博物館に提出されており,それを見ていたため,普段ならセリ科はニガテ・・としっぽを巻いて逃げだすところなのに,タダモノではないと勘が働いたのである。

これは一度,実物を見たいと思って早速上原さ



図1. セリモドキの葉 (横浜市旭区 2015.8.23 秋山幸也撮影)。



図2. セリモドキの花序 (横浜市旭区 2015.8.23 秋山幸也撮影)。

んにご案内いただいた。里山景観を維持するために地元ボランティアによって管理,維持されている緑地の,遊歩道のすぐ脇に生えていた。法面上に生えていることを差し引いても高さ1.5m以上はありそうな大きな株で,葉の硬い質感(図1)や線形の小総苞片,5mmほどある果実の大きさ(図2)など写真では分かりにくかった点も確認できた。後日,北川淑子さんも現地を確認され,セリモドキと同定していただいた。

セリモドキは勝山ほか (2006) において絶滅危惧 I A 類に選定され,古い記録では横浜市緑区,保土ヶ谷区,旭区,1988年に大和市中心林間で記録されたものの,1995年以降はいずれの産地でも確認できていない。今回は前出の大和市(2011年)に次ぐ確認となる。

今回発見されたのは1株のみで,上原さんが周辺のヤブを探し回ったものの,ほかには見つけられていない。草刈りなどの手入れによって刻々と環境が変化する場所なので,今後も条件次第で発芽,開花するのではないかと考えられる。上原さんに,側枝の1本が開花したら標本にしていただくよう,また,今後も注意して見ていただくようお願いをした。

標本：相模原市旭区 上原 健 2015.9.13 SCM52052.

引用文献

馬場しのぶ, 2012. 大和市・泉の森にセリモドキ.

Frola Kanagawa, (74) : 887.

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編), 神奈川県レッドデータ生物報告書 2006, pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

アレチケツメイ（マメ科）が広がっていませんか？

（浅野牧子・埜村恵美子・大西 亘）

藤沢市稲荷の引地川左岸（城下橋際）の堤防上の植栽の中に、2006年頃より“カワラケツメイ”として毎年確認していた植物があった（図1）。2013年になって藤沢市の他のいくつかの場所で“カワラケツメイ”が見つかった際、引地川左岸の“カワラケツメイ”と雰囲気の異なるのが気になり、調べてみた。すると、引地川左岸のものはアレチケツメイ *Chamaecrista nictitans* (L.) Moench（マメ科）と判明した。アレチケツメイは北アメリカや西インド諸島原産の1年生あるいは多年生草本で、日本では2005年に岐阜県で初めて確認され、愛知県や静岡県に帰化が知られている（廣田, 2010）。これまで県内での記録は他にないようだが、広がりつつあるかもしれない。アレチケツメイとカワラケツメイ *Chamaecrista nomame* (Sieber) H. Ohashi との区別点を表1に示す。みなさんの調査地でも気を付けていただきたい。



図1. 引地川左岸の生育地（中央下部にアレチケツメイがまとまって生えている）。

標本：藤沢市稲荷 浅野牧子・埜村恵美子 2013.8.6
KPM-NA0220171, KPM-NA0220172, KPM-NA0220173.

引用文献

廣田伸七, 2010. アレチケツメイ. 植村修二ら編.

日本帰化植物写真図鑑 第2巻. pp.124-125. 全国農村教育協会, 東京.

表1. アレチケツメイとカワラケツメイの形態上の主な違い。

	アレチケツメイ <i>Chamaecrista nictitans</i> (L.) Moench	カワラケツメイ <i>Chamaecrista nomame</i> (Sieber) H. Ohashi
葉柄の腺点		
茎	柄があり、ラップ状に飛び出す 基部で分枝する	柄がなく、葉柄に埋もれる 幹から分枝する
花	 下部の1枚が著しく大きい	 5枚の花弁がほぼ同じ大きさ

牧野富太郎博士が相模山北で採集したシダ植物

(支倉千賀子)

牧野富太郎博士が相模山北でヤマキタダケ(支倉, 2015)と同時に採集したシダ植物の標本を首都大学東京牧野標本館で確認したので報告する。



図1. メヤブソテツの標本 (MAK8520 支倉千賀子撮影)。

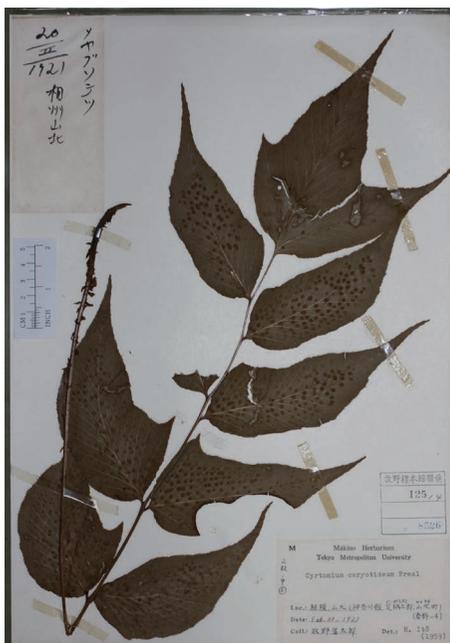


図2. メヤブソテツの標本 (MAK8526 支倉千賀子撮影)。



図3. ヒメカナワラビの標本 (MAK8575 支倉千賀子撮影)。

確認したのは、メヤブソテツの標本2点(図1, 2)、ヒメカナワラビの標本1点(図3)の2種3点であり、これらは支倉(2015)により触れられているが、特に標本画像とともに改めて示した。

標本には牧野富太郎博士の直筆のラベル(図4)が貼ってあり、当時どのように日付を表記していたかが伺える興味深い標本である。また、シカの過度の採食を受けていない頃の植物の大きさがわかる立派なものである。

標本の閲覧に際して首都大学東京牧野標本館の菅原敬准教授にお世話になりました、感謝いたします。

標本: メヤブソテツ:
相模山北 T.Makino
1921.2.20 MAK8520;
MAK8526, ヒメカナ
ワラビ: 相模山北
T.Makino 1921.2.20
MAK8575.

引用文献

支倉千賀子, 2015. ヤマキタダケ(イネ科)のレクトタイプ選定. 植物研究雑誌, 90: 200-205.

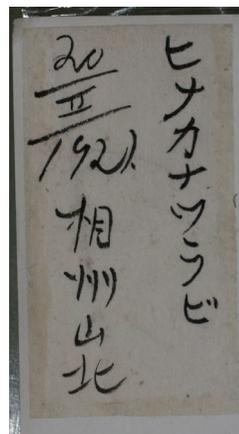


図4. ヒメカナワラビ(MAK8575)の牧野富太郎の直筆ラベル(支倉千賀子撮影)。

横浜市の保土ヶ谷公園のヤナギ

(山口純一)

神奈川県立保土ヶ谷公園に、ヨシノヤナギが生育するとのネット情報(斗夢, 2014)を得て調べたところ、コゴメヤナギであったので報告する。

2014年9月頃、同公園管理事務所に確認をとり訪れたところ、件のヤナギ属樹木は植栽の高木で根元に名札が立てられていた。同公園によると、名札は横浜市立桜丘高等学校の生徒が、生物の先生の指導のもとに設置したとのこと(2012年樹木No. 12と表記)。ヨシノヤナギ *Salix yoshinoi* Koidz. は、近畿地方から中国地方、および四国に分布し(木村, 1989)、関東には自生しないと思われる。樹高が高く枝葉が届く位置にないため、台風が通過した後の10月14日に再訪し、落下枝を採集した。成葉は線状被針形から卵状広被針形、鋭頭、長さ50–85mm、幅8–24mm。生時の葉表は緑色から濃緑色で、やや光沢がありほぼ無毛(図1)。葉裏は灰緑色からやや弱い灰白色、はじめ有毛だがのち無毛となる(図2)。枝ははじめ微軟毛が密生するが、のち無毛となる。ヨシノヤナギの葉裏は緑色基調でときに光沢があり(吉山, 2000)、該当樹木の形質とは一致せず、ヨシノヤナギではなかったが、葉裏が帯白色となるウラジロヨシノヤナギ *S. pseudoyoshinoi* Koidz. があり、同じシダレヤナギ節(Sect. Subalbae Koidz.)のコゴメヤナギ *S. serissaefolia* Kimura、シロヤナギ *S. jessoensis* Seemen などとは区別が難しく、種の確定には至らなかった。

12月18日、冬芽の確認のため落下枝を採集した。冬芽は長楕円形で円頭、はじめ微軟毛が密生する。冬芽を分解精査すると雌花であったが、冬

芽での種の判別は難しいため、同定は花時を待つことにした。

2015年4月16日、花穂の付いた落下枝を採集した。子房は長卵形、無柄で基部に少毛があるほかは無毛。花柱は短く柱頭は長く不規則に開出する。胚珠は4個を確認。苞は卵形で基部付近有毛である。腹腺体1個があり、やや方形。ウラジロヨシノヤナギは子房が多毛であることから(小泉, 1935)、該当樹木は該当せず。枝がやや太く、成葉の葉裏が帯白で、子房には基部のみに少毛があることなど(Kimura, 1926)からコゴメヤナギと同定した。

ネット上には多くの情報が飛び交い、上手に活用すれば大変有効な情報源であるが、玉石混合時には混乱していることもあり、同じ神奈川県内の事例であるが、ヤマヤナギ *S. sieboldiana* Blume についても今回と同様なことを経験している。公園などでつけられた名札は、公園管理者が植物分類の専門家や研究者などと連携しているとは限らず、難しい種の場合は注意が必要であろう。

引用文献

- Kimura A., 1926. Contributiones ad Salicologiam Japonicam II. Bot. Mag. Tokyo 40: 633–643.
木村有香, 1989. ヤナギ科. 日本の野生植物 木本 I, pp.31–51, pl. 39–58. 平凡社, 東京.
小泉源一, 1935. 雑録 ウラジロヨシノヤナギ. 植物分類地理, 4: 40.
斗夢, 2014. 日々は口実 ヨシノヤナギ. Available from internet: <http://to-mu.blog.so-net.ne.jp/2014-01-05/> (downloaded on 2015-8-30).
吉山 寛, 2000. ヤナギ科. 樹に咲く花 離弁花 1, pp.38–121. 山と溪谷社, 東京.



図1. コゴメヤナギの葉表(横浜市保土ヶ谷区2015. 10.14 山口純一撮影).



図2. コゴメヤナギの葉裏(横浜市保土ヶ谷区2015. 10.14 山口純一撮影).

2015年の栄区の植物調査から

(林 辰雄)

・5月4日飯島市民の森のせせらぎ緑道でクジャクシダ *Adiantum pedatum* L. を記録. いつも歩いているコースだが, この時は周りの植生がまだ薄く, 初めて気がついた. ここはキツタやドクダミ, クマワラビ, ヤマブキなどに隠されて目に付きにくい場所であり, クジャクシダは暗い場所に貧弱な姿で数株が見られた. 痛んだ葉を2枚採取して今後の成長を見守ることにした.

『神植誌01』の栄区には採集点がないので初めての記録と思われる.

・7月10日, 同じ飯島市民の森でコヤブタバコ *Carpesium cernuum* L. を記録. 尾根上の2本の大きなカクレミノの近くの野外卓のある場所で3株のコヤブタバコ(キク科)をみつけた. 飯島市民の森で見たのは初めてもう少し先にも10株ほどが点在していた.

これで栄区では飯島団地のコヤブタバコと合わせて2カ所の自生地を確認できた. どちらも木漏れ日が射しこむような環境であった. コヤブタバコの花は地味で目立たないので摘まれる心配は少ないが, 反面, 気づかずに踏みつけられる恐れがある.

・5月15日金井町265, 辻前の交差点近くの路上で, たった, 1株のウサギノオ *Lagurus ovatus* L. を採集した. ウサギノオはイネ科ウサギノオ属の1年草で, 原産地は地中海沿岸. 白くて長さ3掌ほどの卵円形の花序が可憐で, 園芸店で観賞用植物として売っている.

県内でも数ヶ所で採集されており, 今後は野性化したものが各地で見られるかもしれない.



図2. ウサギノオ (横浜市栄区金井町 2017.5.15 林辰雄撮影).

2015年2月から2015年7月までの植物誌勉強会

(勝山輝男・大西 亘・支倉千賀子・木場英久)

・2015年2月11日 クスノキ科の常緑樹とよく似た樹木 (大西 亘)

一般的な図鑑や『神奈川県植物誌2001』では, 科が異なるとそれぞれの特徴を比較することは難しい. また, 県内で広く目にする機会があるにもかかわらず, クスノキ科の樹木は同定の不正確な標本が混在することが少なくない. そこで, 県内に分布するクスノキ科の常緑樹を中心に, よく似た常緑樹を見分けるポイントに焦点を当てた. クスノキ科植物と類似する種類ごとに, (1) タブノキとマテバシイ, アカガシ, (2) ホソバタブとバリバリノキ, カゴノキ, ミミズバイ, カンザブrouウノキ, バクチノキ, タラヨウ, (3) クスノキとヤブニッケイ, ニッケイ, (4) シロダモとイヌガシ, の4つのグループに分け, それぞれの標本を比較して識別点を把握できるようにした.

・2月28日 タケ・ササの分類 スズザサの仲間 (支倉千賀子)

スズザサの仲間は神奈川県ではスズダケとトクガワザサ, ミヤマクマザサなどのササ類との雑種由来のものが局所的に分布し, 両親と混生していることが多く野外では気づかれにくい. そこで『神奈川



図1. クジャクシダ (横浜市栄区飯島市民の森 2017.5.4 林辰雄撮影).

県植物誌 2001』359～379ページの検索表を用いてスズダケおよびトクワガザサ、ミヤマクマザサといったササ類とハコネナンブスズ、ツクバナブスズなどのスズザサの仲間との形態の識別を試みた。野外では周辺にあるササ類よりも着葉数が少なく、稈鞘が枝にとられてきつく巻く、稈の中部に着く稈鞘は節間よりやや短い程度で少しだけ稈が露出するなどのスズザサの仲間の特徴を捕まえると発見しやすく、さらに枝が躍るように出る、葉身がはげしく左右不对称で基部はやや楔形が強くなるなどの特徴も持つので確認するとよい。種までいき着くには葉裏・葉鞘・稈鞘の毛の状態をみる。

・3月20日 イネ科イチゴツナギ属（木場英久）

カラスムギを使ってイネ科用語の再確認から話を始めて、県内産のイチゴツナギ属の同定の要点を『神奈川県植物誌 2001』の検索表に沿って、解説した。「内穎の竜骨に圧軟毛があるか、それとも竜骨は粗澁か」とか、「護穎の脈間に毛があるかどうか」とか、「葉舌は円頭であるか、それとも尖るか」などについて、標本ではなく、解剖してよい押し葉を配布して、それを触ったり、壊したり、実体顕微鏡で観察しながら学んだ。実物を見ながら解説を聞いたので、理解が深まったのではないかと思う。また、植物誌のp.276に掲載されているイチゴツナギの全体図は、どのような特徴を表現したつもりかなどについても説明した。

・4月29日 アブラナ科属への検索（勝山輝男）

アブラナ科であることはすぐわかるが、どの属に属すのか判断するのは難しい。そこで、『神奈川県植物誌 2001』747～748ページの検索表を用い、属への検索を試みた。用意した標本はアマナズナ属（ヒメアマナズナ）、イヌガラシ属（スカシタゴボウとイヌガラシ）、ミヤガラシ属（ミヤガラシ）、ナズナ属（ナズナ）、ニワナズナ属（ニワナズナ）、カラクサナズナ属（カラクサナズナ）、マメグンバイナズナ属（マメグンバイナズナ）、アコウグンバイ属（アコウグンバイ）、グンバイナズナ属（グンバイナズナ）、クジラグサ属（クジラグサ）、エゾスズシロ属（エゾスズシロ）、イヌナズナ属（イヌナズナ）、キバナハタザオ属（ホソエガラシ）、オハツキガラシ属（オハツキガラシ）、ヤマガラシ属（ハルザキヤマガラシ）、キバナズシロ属（キバナズシロ）、アブラナ属（カラシナ）、ダイコンモドキ属（ダイコンモドキ）、シロガラシ属（シロガラシ）、ハナハタザオ属（ハナハタザオ）、ダイコン属（ハマダイコン）、タネツケバナ属（タネツケバナ）、ワサビ属（ユリワサビ）、オランダガラシ属（オラン

ダガラシ）、オオアラセイトウ属（オオアラセイトウ）、ハタザオ属（ヤマハタザオ）、シロイヌナズナ属（シロイヌナズナ）。短角果と長角果、果実の嘴の有無、果実は扁平か円柱形か4稜形か、種子が1列か2列かなど、ある程度果実が稔っていないと属への検索は難しいので、できるだけ結実している標本をサンプルとして用意した。

・5月23日 アブラナ科イヌガラシ属とタネツケバナ属（勝山輝男）

前回に引き続きアブラナ科をとりあげた。イヌガラシ属とタネツケバナ属について標本を見ながら種の見分け方を確認した。イヌガラシ属はコイヌガラシ、ミチバタガラシ、イヌガラシ、コゴメイヌガラシ、キレハイヌガラシ、スカシタゴボウ、ヒメイヌガラシ、ミミイヌガラシの標本を確認した。タネツケバナ属はタネツケバナ、ミチタネツケバナ、ミズタネツケバナ、オオバタネツケバナ、タチタネツケバナ、ジャニンジンとの区別を標本で確認した。また、神奈川県産のアキノタネツケバナを標本で確認した。アキノタネツケバナ *Cardamine autumnalis* Koidz. は『神奈川県植物誌 2001』には掲載されていない種で、『千葉県植物誌（2003）』の248ページで会員の堀内さんが報告されたもの。葉形はタチタネツケバナに似るが茎は柔らかく秋に開花する。千葉県植物誌でタネツケバナ属を担当された堀内さんが参加されていたので、アキノタネツケバナとココイタネツケバナについて解説していただいた。

・6月6日 モクセイ科イボタ属、ニシキギ科ツルウメモドキ属、マタタビ科（勝山輝男）

ちょうど野外でイボタやネズミモチなどが開花する季節になったので、モクセイ科イボタ属をとりあげた。ネズミモチ、トウネズミモチ、オオバイボタ、オカイボタ、ミウライボタ、イボタ、ミヤマイボタ、コミノネズミモチ（シナイボタ）の標本を用意した。『神奈川県植物誌 2001』の検索表や記述を見ながら、ネズミモチとトウネズミモチの区別、イボタ類とネズミモチ類の花の違い、イボタとミヤマイボタの区別、オオバイボタとオカイボタおよびミウライボタの区別などを標本で確認した。オオバイボタ、オカイボタ、ミウライボタは形態が連続していて、典型的なものは良いが、判断に迷う個体も多いようだ。コミノネズミモチ（シナイボタ）はセイヨウイボタと混同されていたもので、花冠筒部は短く、2本の葯は長く突き出る（図1）。

ニシキギ科ツルウメモドキ属のツルウメモドキ、イワウメヅル、オオツルウメモドキの区別点を標

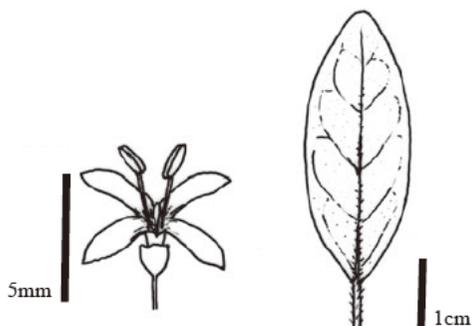


図1. コミノネズミモチの花(左)と葉(右).

本を用いて確認した。また、ツルウメモドキの種内分類群(ツルウメモドキ、イヌツルウメモドキ、オニツルウメモドキ)を標本で比較。

マタタビ科のマタタビ、ミヤママタタビ、サルナシ、オニマタタビの区別点を標本で確認。サルナシとウラジロマタタビの葉裏の色を比較した。

・7月4日 ハエドクソウとナガバハエドクソウ、イワタバコとケイワタバコ、ヒメヤブランとジャノヒゲ、ヤマブキシウマとアカシウマ、チダケザシ属(勝山輝男)

ハエドクソウとナガバハエドクソウ、イワタバコとケイワタバコは一般の図鑑では必ずしも区別されていないが、『神奈川県植物誌2001』では変種扱いではあるが、明確に区別できるものとした。ハエドクソウとナガバハエドクソウは葉形や茎葉の間隔、葉裏の細脈、花冠の長さ、花期が異なる。イワタバコとケイワタバコは花茎や葉裏の毛の有無だけでなく、ケイワタバコは葉の基部が左右非対称で花期も1ヶ月近く早い。

ヒメヤブランとジャノヒゲは全体の形は似ているが属が異なる。ヒメヤブランの花は上向きに咲き、雄しべは明らかな花糸があり葯の先は尖らないが、ジャノヒゲ属では花は下向きに咲き、雄しべは花糸が著しく短く、葯の先が尖る。花がなくても、ヒメヤブランの葉の縁は滑らかであるが、ジャノヒゲの葉の縁は刺状の鋸歯がある。その他、ジャノヒゲとナガバジャノヒゲ、オオバジャノヒゲの違いを標本で確認した。

ヤマブキシウマとアカシウマは科が異なるが、しばしば混同されている。ヤマブキシウマはバラ科で雌雄異株、花柱は3個、葉脈は平行して縁までまっすぐに伸びる。アカシウマはユキノシタ科で両性花をつけ、花柱は2個、葉脈はやや弧を描く。また、チダケザシ属は似たものが多く、神奈川県にはアカシウマ、トリアシウマ、フジアカシウマ、チダケザシ、ヒトツバシウマがある。これらの相違点を標本で確認した。

2015年度総会の報告

(事務局)

2015年4月5日(日)、生命の星・地球博物館において、2015年度の役員会・総会が開催され、報告・議事とも、了承されました。また、総会終了後には、生命の星・地球博物館の勝山輝男氏による「サヴァチェの採集した神奈川県産の植物標本」、田中徳久氏による『神奈川県植物誌2001』から分かったこと一次の植物誌での「プラスα」と題した話題提供がありました。

● 2014年度 事業報告

● 2014年度 決算報告・監査報告

●各ブロックの活動報告

2014年度の各ブロックの活動についての報告
がありましたが、ここでは紙数の関係で割愛させて
いただきました。

●2015年度 運営体制

●2015年度 事業計画

●編集委員会について

Flora Kanagawa No.79の報告でメンバーに誤り
がありました。田村 淳氏が漏れていました。申
し訳ありません。

編集委員：秋山幸也・内山 寛・大西 亘・大場達之・
大森雄治・岡 武利・勝山輝男・城川四郎・木場
英久・佐々木あや子・関口克己・田中徳久・田村
淳・支倉千賀子

●2015年度 予算

目次

中島 稔：ムカゴサイシンとクモキリソウ	951
秋山幸也：相模原市緑区でサカネランを確認	953
秋山幸也：横浜市旭区でセリモドキを確認	954
大西 亘：アレチケツメイ（マメ科）が広がっていませんか？	955
支倉千賀子：牧野富太郎博士が相模山北で採集したシダ植物	956
山口純一：横浜市の保土ヶ谷公園のヤナギ	957
林 辰雄：2015年の栄区の植物調査から	958
勝山輝男・大西 亘・支倉千賀子・木場英久：2015年2月から2015年7月までの 植物誌勉強会	958
事務局：2015年度総会の報告	960
前号（No.79）の正誤	962
編集後記	962

前号（No.79）の正誤

3月に発行したFlora Kanagawa No.79ですが、
頁番号をすべて間違え、No.78と同じ頁番号を

振ってしまいました。以下に目次を示し、訂正し
ます。

目次

	誤	正
勝山輝男：神奈川県の本ケイソウ属 <i>Hylotelephium</i> H. Ohba	923	→ 935
勝山輝男：小田原市久野で採集されたリトウザンヨモギ <i>Artemisia anomala</i> S. Moore	925	→ 937
田村 淳・中西のりこ・指村奈穂子・長澤展子・野辺陽子：56年ぶりのタチヒ メワラビの発見	926	→ 938
中島 稔：横浜市にオオバクサフジが残されている	927	→ 939
大西 亘：分布を拡大するヨシススキ	928	→ 940
田中徳久：『神奈川県植物誌 2001』刊行後に記録された神奈川県新産の帰化植物	929	→ 941
中山博子：「西湘シダ勉強会」の紹介と2014年度の活動記録	931	→ 943
三樹和博：ある日の「澤田日記」	932	→ 944
木場英久：植物誌の直し方	933	→ 945
勝山輝男・田中徳久・支倉千賀子：2014年9月から2015年1月までの 植物誌勉強会	936	→ 948
事務局：編集委員会報告	937	→ 949
事務局：堀川美哉氏ご逝去	938	→ 950
総会の案内	938	→ 950
編集後記	938	→ 950

編集後記

8月12日、会の運営委員で、シダ植物やラン科
を執筆されたきた秋山 守氏のご逝去されました。
私自身、本会や横浜植物会でたいへんお世話になっ
ており、葬儀に参列したかったのですが、旅行中
で伺えませんでした。ご冥福をお祈りします。

総会后、今号の編集に取り掛かる予定でしたが、
総会記事以外、原稿がなく、総会の報告が遅くな
り、申し訳ありません。また、7月になり、この
ままでは、遂に年1号の発行に成りかねないと慌
て、急ぎよ、原稿を募集したところ、いくつかの
原稿をお寄せいただきましたが、その後、諸事多
忙になり、発行が遅れ、早くに原稿をお寄せいた
だいた方々には、ご迷惑をおかけしました。

2017年の新しい植物誌の発行まで、3年を切り、

今年中には、執筆者を確定しようと、現在、編集
委員会の開催を計画しています。事務局あるいは
編集委員より、お声掛けの際には、快く執筆をお
引き受けいただければと思います。

なお、宣伝になりますが、生命の星・地球博物
館では12月19日（土）より、「日本のスゲ 勢
ぞろいー撮って 集めた 269種！ー」（仮称）
を開催します。ぜひ、ご観覧ください。（田中徳久）

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000円